

心理学水曜会(水曜夜の会)について

(<http://humanbeingasap.blog.fc2.com/blog-entry-353.html> アーネスト・ジョーンズ著『フロイトの生涯』Vより)

しだいに彼の論文からの抜粋が精神医学雑誌に出るようになり、20世紀のはじめの10年が終わる頃までには、長文の批評が氾濫するようになり、時には何百ページにもわたるものが現れたほどである。

後の多くの同種の協会の母体となった、有名なウィーン精神分析学協会の始まりを解明するのは必ずしも容易ではない。

世紀の変わり目に神経症の心理学についてのフロイトの講義を大学で聞いていた者のうちで、2人の医師がそれに興味を持ち続けた。

それはマックス・カハーネとルドルフ・ライトレルである。

ライトレルはフロイトの次に精神分析を行ってみた人となった。

カハーネは神経症患者のための療養所で働いていたが、電気の使用など伝統的な治療方法のみを行なった。

彼は1907年に協会から退く。

1901年にカハーネはフロイトの名をヴィルヘルム・シュテーケルに告げ、この人は神経症の治療に根本的な革命をもたらす方法を考案した神経学者だと言う。

シュテーケル自身も1895年に小児期の交接について論文を書いたことがあるが、当時はまだフロイトの名を知らなかった。

シュテーケルは当時厄介な神経症に苦しんでいて、フロイトに助力を乞うた。

彼はすぐに助けてやり、それは大変うまくいった。

シュテーケル自身は1903年に精神分析の仕事をしている。

最初の弟子の第四の者は、これもウィーンの医師であったアルフレート・アドラーでした。

1902年の秋フロイトはカハーネ、ライトレル、シュテーケル、アドラーの四人に葉書を出して、自分の仕事について議論するために自分の家に集まらないかと言った。

シュテーケルは、自分がこの案をフロイトに出したのだと言ったが、これは確かにそうなので、フロイトは「分析的療法の有効さを経験したことのある同僚から会を持つという案が出た」と言っている。

従って最初の精神分析学協会を設立した名誉はフロイトと共にシュテーケルに与えてもよいであろう。

いずれにしてもその時から後、毎水曜日の夜議論をするためにフロイトの待合室に集まるのが慣わしになった。

この会には「心理学水曜会」というつましい名がついた。

シュテーケルはいつもその議論を毎週『新ウィーン日々』の日曜版に書き送った。

次の2、3年の間には他の人々もこの会に加わったが多くはたつた一時的なものであった。

アーネスト・ジョーンズによると、それはマックス・グラーフ、やがてフロイトの出版者となるフーゴー・ヘルラー、アルフレート・マイスルなどだけのようである。

その後もっと有名な人々が現れてくる。

1903年にはパウル・フェデルン、1905年には昔の学友のフェデルンに紹介されてエドゥアルト・ヒッチュマン、1906年にはアドラーの紹介状と自分の小著『芸術と芸術家』の現行の写しを持ってフロイトのところへ来たオットー・ランク、そしてイジドール・ザドゲル、1907年にはグイドー・プレヒエル、マキシミアン・シュタイネル、そして叔父のザドゲルに紹介されたフリッツ・ヴィッテルス、1908年にはサンドール・フェレンツィ、オスカー・リー、ルドルフ・ウルバンチュイッチュ、1909年にはJ. K. フリートユング、ビクトール・タウスク、1910年にはルートヴィヒ・ノエケルス、ハンス・ザックス、ヘルベ

ルト・ジルベレル、アレフレート・フォン・ヴィンテルシュタインなどである。

最初の頃に協会が招いた客は、1907年1月30日にマックス・アイティンゴン、1907年3月6日、C. G. ユングとL. ビンスヴァンガー、1907年12月18日、カール・アブラハム、1908年5月6日、A. A. ブリルとアーネスト・ジョーンズ、1909年2月10日にはA. ムートマン、1909年4月4日にはニューヨークのM. カルパス、1909年11月3日、L. イエケルス、1909年12月15日、L. カルピンスカなどであった。

1908年の春、この小さな協会は蔵書を集め始めた。

これは1938年ナチスが破壊しに来る頃までには立派なものになっていた。

同時に協会にはもっと正式の名が付き、以前の「心理学水曜会」は今や「**ウィーン精神分析学協会**」となり、今もその名で知られている。

この時期は、内的にも外的にも極めて実り豊かな頃であった。

<以下、すべてウィキペディアより引用しています。あくまでも参考ということで…>

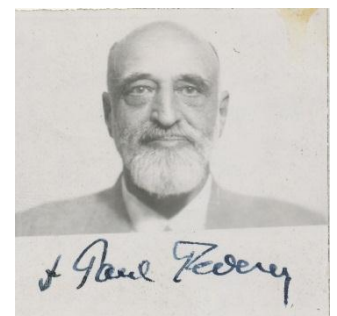
国際精神分析協会 (こくさいせいしんぶんせききょうかい、英: International Psychoanalytical Association ; IPA) は、12000 人を超える正会員を擁し、70 を超える構成団体を傘下に持つ精神分析の普及・発展を目的とした団体である。フェレンツィ・シャーンドルによって組織化が提案され、1910 年ジークムント・フロイトによって設立された。初代代表はカール・ユング、初代幹事はオットー・ランク。日本においては日本精神分析協会が加盟団体として活動している^[1]。**国際精神分析学会**と表記されることもあるが、その場合は 2 年に一度開催される国際精神分析協会主催の国際会議を指すことが多い。主な事業活動は国際学会の開催、協会誌の発行、精神分析家の訓練と認定などである^[1]。永久事務局所在地はロンドン。会員数は、正会員 12000 名超。

ヴィルヘルム・シュテーケル Wilhelm Stekel (ドイツ語: [ˈʃtɛːkəl]、1868 年 3 月 18 日 - 1940 年 6 月 25 日) は、オーストリアの医師および心理学者で、初期のシグマント・フロイトの一人となり、かつて「フロイトの最も著名な弟子」と呼ばれていました。アーネスト・ジョーンズによれば、「Stekel は、フロイトと一緒に、最初の心理分析的な社会を創設したという名誉を与えられるかもしれない。彼はまた、「抑圧された物質を検出するための珍しい感覚を持つ、自然に才能のある心理学者」として彼を描いた。彼は後に Freud と落ち込み、1912 年 11 月に「Stekel は自分の道を進んでいる」と発表した。彼の作品は翻訳され、多くの言語で出版されている。(ウィキペディアの英文を自動翻訳)



『無意識の発見(下)』p.217~参照

ポール・フェダーン(英: Paul Federn、1871 年 10 月 13 日 - 1950 年 5 月 4 日) は、アメリカ合衆国の医学者、精神科医、精神分析家^[1]。**パウル・フェダーン**と表記されることもある。ジークムント・フロイトに直接師事した精神分析の先駆者の一人。自我心理学の発展に大きく貢献した^[1]



オットー・ランク(Otto Rank、(*Otto Rosenfeld*), 1884年4月22日 - 1939年10月31日)は、オーストリアの精神分析家。医師以外の精神分析家としては初めての人物である。機械商として働いた。フロイトの著作に出会い精神分析に興味を抱いた。その後フロイト本人に出会い精神分析の道に進んだ。ランクは医師ではなかったものの、その才能をフロイトに評価され、20年間にわたりフロイトに最も近い存在の一人としてフロイト並びに精神分析を支えた。ランクの唱えた出産外傷説(en)が、エディプス学説と排反するという判断をフロイトからなされたこともあり、1926年パリに移住する(この経緯の複雑さについては「フロイトとの決裂」の項を参照のこと)。その死までの14年間にわたり、フランス及びアメリカで、講義(講演)、著作、心理療法に充実した活動を行った。



フェレンツィ・シャーンドル(**Ferenczi Sándor**, 1873年7月7日 - 1933年5月22日)はハンガリーの精神分析医。

ポーランド人の両親パールーフ・フレンケル Baruch Fränkel (1830 クラクフ出身 - 1888)、ローザ・アイベンシュッツ Rosa Eibenschütz のもとアレクサンダー・フレンケル Alexander Fränkel として生まれる。1881年(7歳か8歳)一家はハンガリー的なフェレンツィに改姓する。ジークムント・フロイトの門人で、初期の同僚。

精神分析療法の実験を行い、またフロイトとは袂を分かち、また故国からハンガリー学派の研究者を生むことになった。実母や乳母に虐待されて育ったと言われており、そのせいかアルフレッド・アドラーとは別の意味でフロイトのエディプスコンプレックスの理論を受け入れなかった。フロイトが反対気味だった心的外傷の研究を晩年まで行っていたことで知られており、近年その実績が再評価されている。



カール・グスタフ・ユング(Carl Gustav Jung, 1875年7月26日 - 1961年6月6日)は、スイスの精神科医・心理学者。深層心理について研究し、分析心理学(通称・ユング心理学)を創始した。

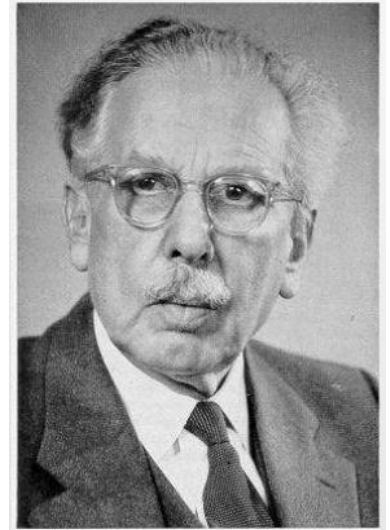
1900年には、ジークムント・フロイトの『夢判断』に触れるものの、当初は特に影響がなかったが^[5]、1907年からは、親交を開始している^[6]。1904年には、勤務先のチューリヒ大学に入院してきた患者のザビーナ・シュピールラインと治療を通して親しくなり、不倫関係となった。ザビーナはユングと別れた後にフロイトに師事し、精神分析家となる^[7]。生理学的な知識欲を満たしてくれる医学や、歴史的な知識欲を満たしてくれる考古学に興味を抱き、友人と活発に議論を交わし、やがて人間の心理と科学の接点としての心理学に道を定めた。精神疾患の



人々の治療にあたるとともに疾患の研究も進め、特に当時不治の病とされた分裂病(統合失調症)の解明と治療に一定の光明をもたらした。ヒステリー患者の治療と無意識の解明に力を注いでいたフロイトと、一時親しく意見を交わした。1911年には国際精神分析協会を設立し、その初代会長になる。フロイトでなくユングなのは、ユダヤ人以外を会長に選ぶ目的があったためである^[8]。ところが、フロイトとは別に神話研究に励むユングは、次第にフロイトとの理論的な違いを表に出し始め、1914年には国際精神分析協会を辞して、フロイトらと袂を分かつことになり^[9]、チューリヒ大学医学部の私講師の職も辞任した

ルートヴィヒ・ビンスワンガー（英：Ludwig Binswanger、1881年4月13日 - 1966年2月5日）は、スイスの医学者、精神科医。姓は**ビンスヴァンガー**とも。現存在分析学派を創始した^[1]。叔父には、脳血管性痴呆の一種であるビンスワンガー病の発見者の**オットー・ビンスワンガー**（英語版）がいる。

1907年にチューリッヒ大学を卒業した。オイゲン・ブローラーに学び、カール・グスタフ・ユング、ジークムント・フロイトらと交友を深めた。フロイトとの親交で精神分析と関わり、後にエトムント・フッサールの現象学、マルティン・ハイデッガーの哲学にも深い影響を受けて現存在分析を創始した^[1]。



ジークムント・フロイト（独：Sigmund Freud、1856年5月6日 - 1939年9月23日）は、オーストリアの精神医学者、精神分析学者、精神科医。オーストリアのモラヴィア辺境伯領のユダヤ人の家庭に生まれた。神経病理学者を経て精神科医となり、神経症研究、心的外傷論研究（PTSD研究）、自由連想法、無意識研究を行い、さらに精神力動論を展開した。精神分析学の創始者として知られる。非常に詳細で精密な観察眼を示す症例報告を多数残した。それらは、現在においても次々と新しい角度から研究されている。フロイトの提唱した数々の理論は、のちに弟子たちによって後世の精神医学や臨床心理学などの基礎となったのみならず、20世紀以降の文学・芸術・人間理解に広く甚大な影響を与えた。弟子たちは、フロイトの考え方のどこかしらを批判した上でこれを受け継ぎ、様々な学派に分岐し、それぞれ独自の理論を展開していった。現代思想、特に大陸哲学、フランス現代思想の哲学者（ジャック・ラカン、ジャック・デリダ、フェリックス・ガタリなど多数）に大きな影響を与え、精神分析を基調とする哲学の創始者とされる。人間が意識していないいわゆる「無意識」を初めて扱ったフロイトの精神分析は、「無意識の哲学^[1]」として非常に重要なものであり、精神分析を広く援用する大陸現代思想に大きな影響を及ぼした。フロイトは精神科医であり、精神医学（そのなかで彼が創始した精神分析学）の研究者・学者である。他方、フロイトが「心理学者」であるか否かは「心理学」という語をどのように定義するかによって異論が存在するが、少なくともフロイト自身は著作の中で自分を心理学者だと述べている^[2]。現代思想、哲学を解説する書物^[3]では広義の哲学者とされることもある。

